

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K00740

研究課題名（和文）保育・教育における省察力と課題解決力の育成のためのAIアプローチの検討

研究課題名（英文）Examination of the AI Approach for the Cultivation of Reflection and Problem-solving Capabilities in Education and Nursery.

研究代表者

音山 若穂（Otoyama, Wakaho）

群馬大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40331300

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：教師や保育者にとって、日々の実践の省察（reflection）は専門性を表す概念の一つと位置付けられ、養成課程においてもその資質の育成が期待されている。しかし、省察力の育成法やその実践についての知見が不足している現状があった。そこで本研究では、組織経営におけるWhole system approachの手法であるAppreciative Inquiryをもとに、保育者や教師向けに個人の省察力の育成のための個別的研修プログラムを開発し、実践を通してその効果を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Whole System Approachは人材開発等の分野で取り入れられているものの、保育・教育における個人の省察力の育成や省察に基づく課題発見・解決力の育成に特化させた研究は少ない。本研究で開発するプログラムは、個人の内的過程に焦点化していながら、対話型アプローチの特徴を活かした集団的訓練が可能であり、特に養成教育においては有用であると考えられる。看護、福祉等他領域においても応用可能と考えられる。

研究成果の概要（英文）：For school teachers and Nursery teachers, reflection on daily teaching practice is regarded as one of the core concepts comprising specialization, and it can be expected that the cultivation of such necessary innate qualities will be fostered during the training course. However, there is a shortage of knowledge regarding the methods of cultivating reflection and its implementation. Therefore, in the present study, based on the appreciative inquiry (AI) approach, which is one of the methods of organizational management, we developed a training program for early childhood educators and teachers to develop their individual reflection capabilities, and verified the effects through teaching practice.

研究分野：保育学

キーワード：Appreciative Inquiry 対話的アプローチ 保育者養成 教員養成

1. 研究開始当初の背景

保育者や教師の実践において、省察 (reflection) は重要な役割を果たすと考えられ、「教育的反省」、「反省的实践」、「反省に考察を加える精神作業」などの概念で示されてきた。近年では特に個々の子どもの特性理解や子どもとの関わりの反省において、保育・教育職の専門性を表す概念の一つと位置付けられ、学生や若手の教師・保育者にとって修習が強く期待される能力と考えられている。

しかし、省察力の育成法やその実践についての報告は少なく、評価指標も保育者に関して(杉村ら,2009) 散見される程度で、学生や教師に関しては知見が不足している現状がある。

一般に省察力の育成には、エピソード・カンファレンスが用いられることが多く、一定の成果は認められるものの、個々の参加者が抱える個別の課題解決に繋がるとは限らない、指導者による助言を無条件に受け入れる姿勢が目立ち、多様な視点が共有されない、実践の不十分さが焦点化されること (deficit base) が多く、行動の改善に繋がりにくいといった懸念があった。

一方、音山ら (2012) は一連の集団的な保育研修の検討を通して、特に学生や若手教職員には、一般的なエピソードよりも、自らの実践・経験を個別に振り返りながら省察力や鑑識眼的評価を育成する訓練が求められており、また幼小接続や教育相談等の観点から学校教員においてもこうした能力が期待されているという実態を得ていた。

2. 研究の目的

そこで本研究では、保育・教育領域の集団的研修のために開発された対話型アプローチ (音山ら,2012;2013) を、一人ひとりの省察力の育成のための個別的研修プログラムに特化し最適化する。具体的には組織経営における Whole system approach の一手法である Appreciative Inquiry (AI; Whitney & Trosten-Bloom,2010) を核とし、テーマ (affirmative topic) の焦点化から、対話を繰り返しながらの省察、さらに析出された個別の課題検討とその解決までを含め、以下の3つの特徴、すなわち 個別の体験が取り上げられることで、個々人の実践課題の発見、解決に直結する、ピア・インタビュー形式で体験を“物語化”し、省察を促すことにより、多様な視点が得られやすい、肯定的 (appreciative) な焦点化が中心で、前向きな行動が引き出されやすい、という特徴をもつ総合的なプログラムを開発する。さらに、開発したプログラムを養成課程 (保育者養成、および小学校を中心とする教員養成) と現場で実践的に検討し、その有用性を確認するものである。

対話型アプローチ (もしくは Whole system approach) を、保育・教育領域における個人の省察力の育成や省察に基づく課題発見・解決力の育成に特化させた研究は、国内外を通して研究例が見当たらない。また、本研究で中心とする AI の特徴である肯定的な (appreciative) 焦点化の技法は、保育・教育の実践研究手法 (アクションリサーチ) としても大きく貢献すると期待されるが、現状では体系的な報告はない。また、本研究で開発するプログラムは、個人の内的過程に焦点化していながら、対話型アプローチの特徴を活かした集団的訓練が可能であり、特に養成教育においては有用であると考えられる。保育者養成や教員養成のみならず、看護、福祉、カウンセリングなど、省察力が専門性と関連する他のさまざまな領域においても、幅広い応用可能性があるものと考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、学習者個人の肯定的な省察力育成プログラムの構築、評価指標を用いた省察力育成の検証、研修プログラムの実践を通じた有用性、の各点について、主に実習指導を含む養成課程の授業実践を通して検討を行うこととした。

については AI を中心とした対話型アプローチが、個人の省察力育成においても効果があるという仮説に基づき、養成課程での実習指導をフィールドにプログラム開発を行った。音山ら (2012) の対話型アプローチによる保育研修の実践は組織課題の解決が中心であったが、現場ではむしろ、園や学校全体の問題より個人の内的過程の育成ニーズも多い。一方、本研究は、個々人の内的過程に焦点を当てるものであり、集団による対話の形式を含みながらもあくまで個別の省察力や鑑識眼的評価力の養成を意図したものである。そこで、まず従来の対話型アプローチをベースとして、それを個人の省察力育成に特化・最適化することが求められる。対話アプローチのなかでは、AI は相互インタビューを通して個人の内的過程を重点的に支援する手法であり、本研究は AI に焦点を当てその実効性を検討することを一目的とした。

については、個人の省察力育成の成果を評価できる指標が求められるが、現在、保育・教育の実践における省察内容の計量的指標は杉村ら (2009) など数少ない。また、グループでの話し合いやピア・インタビューなど、対話を通じた省察を質的・量的に把握できる適当な指標は見当たらない。そこで本研究では、現存の指標を活用し実践の成果を検証するとともに、学習者の感想や自己評価等も活用することとした。

については、養成段階での学習成果、特に実習指導において成果が認められるかを実証的に確認する。大学の規模や地域の実情によって実践に差が生じることが考えられるため、複数の養成課程において実践を進め、それぞれ成果を確認することとした。

4. 研究成果

1) 2016年度の主な成果： 保育者養成課程の学生を対象として、AIのプロセスのうち導入段階であるペアで行うミニインタビューをもとに、保育実習の振り返りのプログラムを作成するとともに、その効果を検証した。学生を対象に授業の一環としてプログラムを実施し、授業時間を活用して活動を行った。うち、短大の学生を対象とした一実践では、その前後で保育者省察尺度と対話の自己評価を測定した結果、実践後には保育に関する気づきが強まっていること、また、自己評価が高い群ではその程度が顕著であることが示された。以上から、AI ミニインタビューを実習の振り返りに導入した効果がある程度示唆され、今後このテーマでの研究や実践を発展させるための一成果を得た(三浦ら,2017)。

対話的アプローチを中心とした看護実習指導に活用できる訓練プログラムを開発し、看護実習指導者講習会で実習指導者向けに同プログラムを試行しその効果を検証した。実践後に共同作業認識尺度および対話の自己評価を測定した結果では、「共同効用」が高い群、対「個人志向」と「互惠懸念」はそれぞれ低い群のほうが、自己評価が高いという結果を得た。他者と協力しあうことの意義や、協同作業について、事前の理解を深めておくことが大切であることが示された(音山ら,2017)。

2) 2017年度の主な成果： グループワーク志向性が課題解決型学習に及ぼす影響について、保育者養成課程学生を対象として授業を通じた実践を行ない、グループワーク志向性尺度および学習後の自己評価項目により検討を行なった。その結果、グループワーク志向性の下位尺度である「スキル」「意義」「達成感」がそれぞれ個人の自己評価に正の影響を及ぼしていること、「意義」がグループ活動の評価に正の影響を及ぼしていることが示された。グループワーク志向性が高い群では、「自身の実習を振り返ることができた」「実習についての考え方が変化した」「個別学習をもとに話し合いができた」「グループで計画的な活動ができた」など、自らの省察や協同学習への意欲への意識が高いことが示された(上村ら,2017)。

音山ら(2014)によるAIミニ・インタビューの試案を実習事後指導において実践し、その前後で保育者省察尺度、自己評価尺度、及び授業の感想を測定し、効果を検証した。AI実施後は「保育者としての」意識や、子どもへの関心が高くなり、「話をする事」「話を聞くことができた」「視野が広がり、保育観を学ぶことができた」など自己評価でも効果が示唆された(利根川ら,2017)。

対話型アプローチにおける展望的視点を促すプログラムについて、三浦ら(2017)をもとに、子どもの1年間の時間の流れをシミュレーションさせる活動を行ない、その後AIミニ・インタビューを行なうプログラム試案を作成し、保育者養成課程学生を対象に実践を行った(音山ら,2018)。

3) 2018年度の主な成果： AIミニインタビューに基づく実習の振り返りを行なうプログラムの作成および改善のため、3週にわたる実習指導で実践を行ない、大学生95名を対象に効果検証を行った。その結果、参加後には保育者省察尺度に向上が見られたほか、自己評価と協同作業意識との関連も認められた(利根川ら,2018)。また、短大女子16人を対象に2週にわたって実践を行った結果では、保育者省察尺度のうち保育者自身に関する省察で事後の得点が上昇した一方、子どもに関する省察と他者との交流を通じた省察では実施後の得点が低下した(織田ら,2018)。

養成段階における専門職としての就業イメージ理解を促すため、キャリアシミュレーションプログラム(労働政策研究・研修機構,2011)を基にした独自の教育プログラムを開発し、学生が実践の中で記入した記録を元に効果検証を行なった。その結果、職業未決定尺度(下山,1986)では職業意識が明確になる方向と、決定を留保しようとする方向と、相反する傾向が認められ、この背景として学生が卒業後に継続して働きたいと考えている年数が影響していることが示唆された(三浦ら,2018)。また、学生が生成した「卒後10年の出来事」の記述を見ると、全体として生活よりも業務の記述が多いものの、後半では生活関連の記述も増えることが示され、また保育職を自らの仕事として継続しようとする記述傾向があることが示された(上村ら,2018)。

4) 2019年度の主な成果： AIミニ・インタビューを用いた実習指導プログラムについて、複数回における授業実践を行い、最終的に提案するプログラムの具体的な実施方法と実施内容について検討した。生成されたストーリーと課題の他、参加者を対象として自己評価、プログラムの改善点等を調査した。その結果、自己評価は総じて高く、グループ対話で生成されるキーワードも肯定的な内容が多かったことが見出され、最終的に提案できるプログラムとして一定の成果があったと考えられる(利根川ら,2019)。

養成施設に学ぶ学生に対し、2年間5回の実習の振り返りにおいてAIミニ・インタビューを取り入れた授業を行なった。その結果、保育者省察尺度については、事後値が低い尺度と、事後値が高い尺度の両傾向が示された。共同作業認識尺度による事後評価では、協同効用の項目で割合が高く示された。(織田ら,2020)。

保育の質の向上に向けた園内研修のICT支援システム開発を行ない、実際に保育施設に介入を行って対話型園内研修での有効性を検証することを目的に、幼稚園1園を対象として年間を通じた園内研修のフィールド観察を行ない、ICT導入以前の段階での研修の実態と課題を明らかにした。その結果、発表準備、資料の保存と再活用、職員間のコミュニケーションの

確保、情報セキュリティ,の4点に課題があることが示され、省察力・問題解決力の育成プログラムにおけるICTの活用が示唆された(音山ら,2020)。

参考文献

- 音山若穂・利根川智子・井上孝之・上村裕樹・三浦主博・河合規仁・安藤節子・和田明人 2012 保育者養成における実習指導への対話的アプローチの導入に関する基礎研究. 群馬大学教育実践研究, 29, 219-218.
- 音山 若穂・古屋健・懸川武史 2014 心理教育的集団リーダーシップ訓練の試み(6)AI ミニ・インタビューによる授業・研修プログラム試案, 立正大学心理学研究所紀要, 12, 65-75.
- 杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃, 2009, 保育における省察の構造, 広島大学幼年教育研究年報, 31, 5-14.
- Whitney, D. & Trosten-Bloom, A. 2002 The Power of Appreciative Inquiry: A practical Guide to Positive Change. Berrett-Koehler Publ. (ヒューマンバリュー(訳)2006 ポジティブ・チェンジ～主体性と組織力を高めるAI～, ヒューマンバリュー)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 上村裕樹・音山若穂・利根川智子・工藤ゆかり・滝澤真毅・三浦主博・織田栄子・坂本大輔	4. 巻 4
2. 論文標題 グループワーク志向性が課題解決型学習に及ぼす影響 - 保育実習事後指導における取り組みについて-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地域福祉サイエンス	6. 最初と最後の頁 105-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 利根川智子・音山若穂・三浦主博・和田明人・織田栄子	4. 巻 41
2. 論文標題 対話的アプローチによる保育実習事後指導の実践-AIミニインタビューによる実習の振り返りと課題の発見	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東北福祉大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 187-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 織田栄子・利根川智子・三浦主博・上村裕樹・井上孝之・音山若穂	4. 巻 45
2. 論文標題 教職実践演習におけるグループアプローチの活用と効果について(2) - 対話型アプローチ「AIミニ・インタビュー」の取組み-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 聖霊女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三浦主博 利根川智子 音山若穂	4. 巻 1
2. 論文標題 「AIミニインタビュー」が実習の振り返りに及ぼす効果	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 保育者養成研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 音山若穂 古屋健 懸川武史	4. 巻 66
2. 論文標題 心理教育的リーダーシップ訓練の試み(7) - 看護実習指導者研修における実践と協同作業の認識との関連-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 221-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 利根川智子 音山若穂 三浦主博 和田明人 織田栄子	4. 巻 41
2. 論文標題 対話的アプローチによる保育実習事後指導の実践 - AIミニインタビューによる実習の振り返りと課題の発見-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東北福祉大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 187-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 利根川智子 音山若穂 織田栄子 上村裕樹 三浦主博,	4. 巻 -
2. 論文標題 対話的アプローチによる保育実習の振り返りの授業実践とその課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教職研究	6. 最初と最後の頁 143-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 音山若穂 坂西秀昭 須藤宣之 懸川武史	4. 巻 37
2. 論文標題 学級経営の充実に向けた特別活動の指導法に関する基礎的検討 対話型アプローチとグループワークを取り入れた授業実践例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群馬大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 297-306
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上村裕樹 音山若穂	4. 巻 57
2. 論文標題 保育者養成課程におけるインストラクショナルデザインに基づく授業設計の試み 受講学生の学習観の変容に注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 聖和学園短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 織田栄子 利根川智子 三浦主博 上村裕樹 音山若穂	4. 巻 48
2. 論文標題 教職実践演習におけるグループアプローチの活用と効果について(4) - 対話型アプローチ「AIミニ・インタビュー」が実習の振り返りに与えた影響 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 聖霊女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 in press
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦主博 音山若穂 利根川智子 上村裕樹 織田栄子	4. 巻 50
2. 論文標題 保育者養成におけるキャリア発達を促すための教育プログラム開発の試み(3)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北生活文化大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 155-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 織田栄子 利根川智子 上村裕樹 音山若穂
2. 発表標題 保育者養成における対話型アプローチを用いた取り組みについて
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三浦主博 上村裕樹 音山若穂 織田栄子
2. 発表標題 保育者養成におけるキャリア発達を促すための教育プログラムの開発(3)
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上村裕樹 三浦主博 利根川智子
2. 発表標題 保育者養成におけるキャリアイメージの段階的構築に向けた教育プログラムの検討(2)
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 利根川智子 織田栄子 音山若穂 三浦主博
2. 発表標題 実習指導におけるピアインタビューを活用した省察力育成の試み
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 音山若穂 三浦主博 利根川智子 上村裕樹 織田栄子
2. 発表標題 対話型アプローチにおける展望的視点を促すプログラムの一試案
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第2回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 織田栄子 利根川智子 三浦主博 上村裕樹 音山若穂
2. 発表標題 保育者養成における対話型アプローチを用いた取り組みについてー施設実習の振り返りにAIミニ・インタビューを取り入れたー実践ー
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第2回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三浦主博 音山若穂 利根川智子 上村裕樹 織田栄子
2. 発表標題 保育者養成におけるキャリア発達を促すための教育プログラムの開発(2)
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第2回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村裕樹 三浦主博 音山若穂 利根川智子 織田栄子
2. 発表標題 保育者養成におけるキャリアイメージの段階的構築に向けた教育プログラムの検討
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第2回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村裕樹 三浦主博
2. 発表標題 保育者養成学生におけるピア・インタビューを取り入れたPBLの実践
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 音山若穂 上村裕樹 井上孝之
2. 発表標題 保育の質向上に向けたICTの活用(2) - 園内研修における活用可能性の一検討 -
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上孝之 上村裕樹 音山若穂
2. 発表標題 保育の質向上と保育者の負担軽減のための保育ICTの活用と展望
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三浦主博 上村裕樹 音山若穂
2. 発表標題 保育者養成におけるキャリア発達を促すための教育プログラムの開発(4)
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第4回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上村裕樹 音山若穂 三浦主博
2. 発表標題 リーダーシップ・トレーニングが保育者養成学生の学習へと及ぼす影響
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第4回研究大会.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 織田栄子 利根川智子
2. 発表標題 保育者養成における対話型アプローチを用いた取り組みについて(2) - 2年間の実習の振り返りにA I ミニ・インタビューを取り入れた一実践
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第4回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 利根川智子 織田栄子
2. 発表標題 対話型アプローチを用いた保育実習振り返りの授業実践－学生の学びと実践における課題
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第4回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上村裕樹 音山若穂
2. 発表標題 社会的スキルのトレーニングが保育者養成学生の省察へと及ぼす影響
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 利根川智子 上村裕樹 音山若穂 三浦主博
2. 発表標題 実習事後指導のペア・インタビューと保育者に関する職業意識について
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	古屋 健 (FURUYA TAKESHI) (20173552)	立正大学・心理学部・教授 (32687)	
研究 分担者	懸川 武史 (KAKEGAWA TAKESHI) (20511512)	群馬大学・大学院教育学研究科・教授 (12301)	
連携 研究者	井上 孝之 (INOUE TAKAYUKI) (40381313)	岩手県立大学・社会福祉学部・准教授 (21201)	
連携 研究者	上村 裕樹 (UEMURA HIROKI) (90369265)	聖和学園短期大学・保育学科・准教授 (41304)	
連携 研究者	織田 栄子 (ODA EIKO) (00279499)	聖霊女子短期大学・生活こども専攻・教授 (41403)	
連携 研究者	利根川 智子 (TONEGAWA TOMOKO) (40352546)	東北福祉大学・社会福祉学部・准教授 (31304)	
連携 研究者	三浦 主博 (MIURA KIMIHIRO) (70310183)	東北生活文化大学短期大学部・人間発達学科・教授 (41306)	